

令和4年度 名古屋大学総長顕彰授与式が行われました

令和5年3月23日（木）

正課外活動への取り組み部門：豊田講堂応接室にて

令和5年3月27日（月）

学修への取り組み部門：豊田講堂にて

学修への取り組み 部門 受賞者	
文学部 人文学科 4年	岡崎 裕太郎
教育学部 人間発達科学科 4年	飯田 みゆ
法学部 法律・政治学科 4年	近藤 由佳
経済学部 経営学科 4年	田邊 ひかり
情報学部 人間・社会情報学科 4年	笹本 宗歩
理学部 物理学科 4年	辻 健志
医学部 医学科 6年	鈴木 理史
工学部 環境土木・建築学科 4年	不動 友輝
農学部 資源生物科学科 4年	池崎 未来

正課外活動への取り組み 部門 受賞者	
教育発達科学研究科 博士前期課程 2年	本郷 汰樹
法学部 法律・政治学科 2年	岩倉 侑
名古屋大学舞踏研究会	鈴木 颯斗 栗田 菜月
国際開発研究科 博士前期課程 2年	キム アレン

(2023年3月時点)

【学修への取り組み部門授与式：豊田講堂】



岡崎 裕太郎さん（文学部）



飯田 みゆさん（教育学部）



田邊 ひかりさん（経済学部）



笹本 宗歩さん（情報学部）



辻 健志さん（理学部）



鈴木 理史さん（医学部）



不動 友輝さん（工学部）



池崎 未来さん（農学部）

【正課外活動への取り組み部門授与式：豊田講堂応接室】



前方右：杉山 直総長、前方左：佐久間 淳一副総長
後方左から栗田 菜月さん、鈴木 颯斗さん、岩倉 侑さん、キム アレンさん



左から佐久間淳一副総長、本郷 汰樹さん、杉山 直総長

岡崎 裕太郎 文学部 人文学科 4年

知識を広げ、極め続けた4年間

私はこの4年間、「様々な知識を吸収する・自分が納得するまで諦めない」という姿勢で過ごすことを意識してきました。

たとえば、専門分野ではギリシャ哲学から近現代の政治哲学、自由意志や差別についての倫理学など、哲学・倫理学の様々な講義を受講し、専門以外にも地理学、日本文学、文化人類学、日本史・西洋史学等多様な分野を学修しました。

どの授業でも疑問点を教授に質問したり、自ら図書館へ足を運び様々な関連書籍を読んだりして自分が頷ける考察ができるよう努力しました。

卒業論文では戦闘員の道徳的平等原則の是非について扱いました。身近ではないテーマでしたが、上記の学修姿勢を崩さず取り組み、様々な視点から自分の合点がいく結論を導くことができました。

さらに、所属していた居合道部でも上記の姿勢を崩さず、主将として技の研鑽や部の円滑な運営に努めました。社会人になってもこの姿勢を崩さずに何事にも取り組んでいきたいです。

講評：論理的かつ創造的な思考能力を持ち、旺盛な好奇心で着実に学修を積み重ねてきた。自己の探求心に向き合い、戦争倫理という重要にも関わらず厳密に検討されてこなかった分野の研究に果敢に取り組み、哲学的議論の理解・整理を進め、柔軟かつ粘り強く検討したことは高く評価できる。課外活動では居合道部主将としてリーダーシップを発揮してきた。他の学生の模範となる人物であり、社会での活躍が期待される。

飯田 みゆ 教育学部 人間発達科学科 4年

教育の実践から学ぶ研究を大切に

本学に入学し、教育学を学ぶことが楽しく、好奇心の赴くままに何事にも挑戦してきました。

1年時は、基礎セミナーに加えて図書館の講座に参加し、レポートの書き方を学びました。2年時には、コロナのため授業がオンラインになりましたが、論文検索を活用して文献を多数読みました。

私が4年間で最も力を入れたのは、3・4年時の教育経営学と教育方法学のゼミ活動です。前者では、北海道宗谷の教育関係者にインタビューし、班で論文を執筆しました。仲間同士で互いの意見を大切にして、学び合う力を身に付けました。後者では、小学校を訪問して、授業の観察と記録を行い、子どもの思考過程を分析しました。試行錯誤を繰り返しながら、卒業論文を執筆し、考え抜く力を身に付けました。

4年間を通して、文献から学ぶことに加えて、教育の現実に向き合う研究を行うことができました。大学院でも教育の当事者との関わりを大切にして、研究を発展させていきます。

講評：自己の経験から感じた学びへの興味について、その関心を深めるべく、様々な活動に参加して見識を広げるとともに、理論的な考察を深めている点が高く評価できる。卒業研究では、小学校

の授業分析に取り組み、事実に基づき論理的に思考する探究力、忍耐力をもとに、高いモチベーションを保ちながら、独創的な知見を導き出した。卒業後は大学院へ進学し、更なる知識の深耕に努めることが期待される。

近藤 由佳 法学部 法律・政治学科 4年

生涯にわたる社会教育の普及に向けて

社会全般を形づくっている様々な事象への見識を深めたいとの思いから4年間を通して分野横断的な学修に励みました。私自身の専門である法学や政治学に限らず、隣接する分野をはじめ幅広い科目を積極的に履修するよう意識してきました。

そのようにして関心の幅を広げていくなかで、生涯学習や社会教育に関する講義に触れ、その重要性を実感したことが、今後の進路にもつながる大きなきっかけとなりました。より専門的な知識を身につけるべく学芸員資格を取得し、社会制度や法整備といった観点も意識しながら学びを深めました。さらに、座学で得た知識を実践に活かすことを目的にボランティア活動にも取り組みました。実際の現場でしか体感できない多くの学びを得るとともに、実情や課題についても考えをめぐらす貴重な機会になりました。

卒業後は在学中に培ってきた知識や経験をもとに、生涯教育の普及と発展に少しでも貢献できるよう努めてまいります。

講評：本学の総合大学という特性を大いに生かし、既存の学問体系にとらわれず、学際的に多様な学問領域を学修し、極めて優秀な成績を修めた。本学の教育理念である「勇氣ある知識人」を体現し、自己の学びだけでなく、ゼミ活動ではリーダーシップを発揮し、友人と支えあう姿勢も評価できる。卒業後は、社会教育施設・生涯教育施設としての博物館の発展に大いに貢献することが期待される。

田邊 ひかり 経済学部 経営学科 4年

チャレンジ精神を大切にした4年間

私は、大学生活の4年間、何事にも積極的に前向きに挑戦することを心がけました。

1年時には、グローバル人材育成プログラムに参加し、留学生との交流を行いました。

入学時の目標であったシンガポール派遣は、新型コロナウイルスの影響により中止となってしまいましたが、派遣に向けた特別講義での学びは価値ある経験となりました。また、大学の講義に積極的に取り組むことと並行し、公認会計士試験の勉強を続け、在学中合格を果たすことができました。4年時には、新たな挑戦として、学外でのクラウドファンディング運営に携わり、売上を上げる難しさ、社会の厳しさを痛感しました。

この4年間、楽しいことだけではなく、辛いこと、悩むことも多々ありましたが、どの経験も自身の成長に繋がったと感じています。

今後は、謙虚な姿勢を忘れることなく、視野を広げて研鑽を積み、周囲・社会に貢献できる人物になれるよう精進してまいります。

講評：合格率が10%台といわれる公認会計士資格を在学中に取得するとともに、大学の学修においても優秀な成績を修めたことは高く評価できる。また、資格を活かし、監査法人でのアルバイトや実務補修所での研修にも参加するなど、キャリア形成に向けて積極的に行動した。この努力と成果は、後輩学生にも刺激を与え、経済学部生のロールモデルになっている。卒業後は公認会計士として、更なる飛躍を期待する。

笹本 宗歩 人間・社会情報学科 4年

情報技術で誰かの夢を実現するために

私は、情報技術を用いて誰かの夢を実現したいという目標を持って名古屋大学の門をくぐり、4年間を通して学業での知的挑戦と課外活動での実践に取り組みました。

学業では、別の科目で得た知識をレポートやテストで用いるというルールを設定したことで知識のブラッシュアップや講義内容の多面的な理解が出来たほか、1年時から国際関係論のゼミに参加したことで、自分に足りなかった国際的な視点を養うことが出来ました。

課外活動では、大学祭実行委員会でWEBサイトを作った経験や、就職支援企業でのコラムライターをした経験の中で、何か取り組みを行う際には組織内外でのコミュニケーションの取り方など、知識以上に重要となる事柄が存在することを肌で感じると共に、そういった制約の中で自分の意見を伝える方法を身に着けることが出来ました。

今後は、これらの学びを活かし、実際に誰かの夢を実現するためのアクションを積極的に起こしていきたいです。

講評：1年時より活発に学修に取り組み、非常に優秀な成績を修めた。卒業研究では、計量的モデルの構築・実証にとどまらず、事例研究、定性的な課題にも取り組み、高く評価された。大学祭のウェブサイト制作や都内企業での長期インターンへの参加など正課外の活動にも熱心に取り組み、高い実践力により着実に成果を積み重ねた。卒業後は社会をリードする有能な人材に成長することを期待する。

辻 健志 理学部 物理学科 4年

物理を通じた世界の追究

私は宇宙創成期の解明を究極的な目標に据え、本学理学部にて創造性と自律性の理念の下、広範的学習を通じた継続的研鑽に努めてきました。中でも、自主的なセミナーによる多角的視点からの現象理解や機械言語の習得による技術向上に力を入れて取り組みました。

所属先での研究活動ではこれらの経験を基盤として、解明に重要な役割を果たす事が期待される原始重力波の検出に向けた技術開発の理論と実験の双方に貢献し、一定の成果が得られたため物理学会にて口頭発表を行いました。また、その後の活動においても更なる検出可能性向上に向けた技術の理論的發展に努め、先行研究で特に難解とされていた部分の飛躍的改善を行いました。結果として限定的な条件の下、感度に大幅な向上を与えました。

卒業後は本学大学院に進学し、この内容を中心とした学術論文の投稿を目指します。また、原始重力波検出による宇宙創成期の解明に向けて漸進的な研究に努めます。

講評：学部4年生時に、これまで誰も成し遂げられなかった研究課題の劇的な改善を達成し、筆頭著者として論文を書き進めるとともに、日本物理学会で口頭発表を行ったことは高く評価できる。博士課程への進学を当初から目標とし、日々研究に意欲的に取り組む姿勢は、他の学生の模範ともなっている。卒業後は大学院に進学し、さらに研鑽を積んで、物理学の新たな地平を切り開く研究者となることが期待される。

鈴木 理史 医学部 医学科 6年

一歩ずつ積み上げて得た学び

私は名古屋大学での6年間、積極的に学ぶことを意識していました。

3年後期の基礎医学セミナーでは、分子病原細菌学研究室でA群連鎖球菌の薬剤感受性の機構について研究しました。担当教員の先生や後輩と積極的に意見交換をしながら配属終了後も継続して取り組み、最終的に論文発表に至ったことは大きな自信になりました。またコロナ禍における実習等の方針を決める会議にも参加し、学生目線での意見を述べる機会をいただきました。

例年通りの実習が困難な中で有意義な実習のあり方を話し合うことで、自分から学ぶことの大切さを再認識しました。

私は学生生活を通して自分から積極的に学ぶ姿勢を身につけることができたと考えています。

卒業後に医師として働くにあたって、今まで以上に自ら学ぶ姿勢が大切になると思います。

医学は日々進歩するので名古屋大学で培ったその姿勢を忘れることなく、生涯学び続け、医師として研鑽を重ねていきます。

講評：真摯かつ主体的に学業に取り組み、極めて優秀な成績を修めた。病原性細菌の研究で優れた成果をあげ、アメリカ微生物学会のトップジャーナルに筆頭著者の一人として論文が掲載されたことは高く評価できる。研究室の他のメンバーへの協力や助言、後輩の指導にも積極的に関わるとともに、医学部剣道部部长も務めるなど、優れた人間性を有している。卒業後は医師として、医学界をリードする人材となることが期待される。

不動 友輝 工学部 環境土木・建築学科 4年

社会を牽引する「エンジニア」として

私は大学生活の中で、学問の垣根を超えた「知の探究」を行うとともに、それによる成果を様々な場面で発信してきました。

具体的には、大学院の輪講への積極的参加や、学外の方との勉強会での議論を通して、専門的な知識を得てきました。また現場の実態を探るべく全国を飛び回るとともに、各地で行われるタウンミーティングや防災ボランティアに参加をし、実践的な知識も身に付けてきました。

以上の「知の探究」を基として、研究や防災啓発活動での成果を社会に発信してきました。特に研究活動では「本社機能移転」という多数の要因が複雑に関連し合うテーマを題材に、実例における調査分析を行いました。これまでの「知の探究」による成果を活かすことで、今後の国土や産業立地のあり方を提言できました。

卒業後は大学院へ進学します。確かな知識と発信力を活かしつつ、社会を牽引する「エンジン」

の役割を担う者として、これからも精一杯活動してまいります。

講評：持続可能で災害に強い社会をつくるという志を持ち、強い探求心で幅広い知識を習得するとともに、社会への貢献を探求する姿勢は高く評価できる。教科書に書かれている理論が現場でどのように活かされているかを自身の目で見て考えることを重視し、防災サークルでの防災イベント運営にも主体的に携わった。卒業後は大学院へ進学後、国家公務員総合職として、社会基盤整備に携わる優れた技術者になることを期待する。

池崎 未来 農学部 資源生物科学科 4年

社会と繋がるトビラを開き行動した4年間

名古屋大学で過ごした4年間は「自分と社会とを繋ぐトビラ」を見つけ、積極的にそれを開き、学びを得ることの連続でした。

一つ一つの講義を丁寧に咀嚼することに加え、生じた疑問をもとに外部セミナーにも参加し、視野を広げてきました。また、所属していた学生団体での活動を通して、規模の大きな問題であっても、傍観者ではなく当事者として課題解決に取り組むことの重要性を学びました。これらの経験を積む中で、研究で環境問題の解決に寄与したいという思いを強く抱くようになりました。そこで、持続可能な社会の構築に向けたソルガムの研究を行っている研究室に所属し、卒業研究ではバイオ製品に利活用できるソルガム搾汁液の糖組成に関する研究を精力的に進めてきました。

卒業後は大学院に進学します。学問に対する真摯な姿勢を忘れず、4年間で身に付けた行動力を糧に、研究のさらなる発展に貢献できるよう精進していきます。

講評：「表面的な知識の記憶に留まらず、深い理解によって高い専門性を身につける」という目標通り、理解できなかった課題にこそ時間をかけて理解を深めていくという学びへの真摯な姿勢が卓越した学修成果につながったことは高く評価できる。卒業論文では、脱炭素社会へ貢献できる研究を志し、着実に成果を積み重ねてきた。卒業後は大学院に進学し、将来有望な研究者として更なる成長を期待する。

正課外活動への取り組み 部門 受賞者 受賞者のことば・講評

本郷 汰樹 教育発達科学研究科 博士前期課程 4年

陸上 100 mで ”名古屋から世界へ”

今年度 11 月、私は静岡で行われた大会の 100 mにおいて 10.12 秒というタイムで走り、東海学生新記録および愛知県新記録を樹立することができました。

これまでの道のりは決して順風満帆だったわけではありません。

およそ 1 年間、ケガで満足に走れなかった時期もあれば、気持ちが燃え尽きて陸上から離れた期

間もありました。しかし、陸上競技を通じて自分の成長を感じることが好きだという気持ちを忘れずに競技を続けてきた結果、この記録を出すことができました。この記録もまだ通過点、道半ばの記録です。日本国内のみならず世界の上位で戦うにはもっとよい記録を出す必要があります、安定してより速いタイムで走ることが求められます。

2024年にはパリ五輪、そして2026年には名古屋でアジア大会が行われます。

“名古屋から世界へ”このテーマを胸に、名古屋を代表するアスリートとしてひとりの人間として、これからも成長し続けていきたいです。

講評：「今」と真摯に向き合うことで、怪我という壁をも乗り越え、昨年秋には東海学生および愛知県新記録をいう偉業を成し遂げたことは大変素晴らしい。2024年パリ五輪、2025年世界選手権、そして名古屋で開催される2026年アジア大会と各大会を見据えて日々鍛錬を積み重ねており、更なる飛躍とグローバルな活躍が大きく期待されている陸上選手のひとりであることは確かであり、本学も一丸となり応援している。

岩倉 侑 法学部 法律・政治学科 2年

未災地で語る 12年前のこと

私は宮城県石巻市旧南浜地区(現：石巻南浜津波復興祈念公園)の出身です。

2011年3月11日に発生した東日本大震災による津波で、自身や家族は無事だったものの、知人や自宅を失うという経験をしました。

本学への進学を機に名古屋へ来てから、東海地方では3.11の記憶や教訓が伝わっていないことを痛感しました。そんな中、知り合いの防災団体の方からご依頼を頂いたことをきっかけに、大学1年生9月から語り部を始めました。約20件の講演会だけでなく、シンポジウム登壇やメディア出演などにおいて多数の機会を頂戴しました。

被災地の外に住み伝承活動をしている語り部は、全体の1%もいません。前例が少ないがゆえに苦労することも多いですが、これから災害に遭う「未災地」の方々に伝えることこそが重要だとの思いから、これからも学業と伝承活動の両立を目指し精進してまいります。

講評：東日本大震災での被災経験により、防災行政に興味をもち、本学法学部で学びを深めるかわら、被災地以外では希少な語り部として、震災の伝承活動（語り部講演）に尽力した。様々な団体と関わりつつ、メディアも活用し、辛い被災経験を若者目線でリアルに伝えることで、減災につながる活動を続けていることは誰しもができることではない大変貴重な活動である。様々な団体や人々と交流しながら今後も活動を継続していただきたい。

名古屋大学舞踏研究会 鈴木 颯斗 経済学部 経済学科 4年

栗田 菜月 医学部 保健学科 4年

“競技ダンス”の活動を通して

私たちは競技ダンス部に所属しています。2年時にカップルを結成し、スタンダードを専攻して以降、最後の大会である4年生の12月冬の全日本戦まで互いに学業と両立させながら練習に励みました。

私たちの目標は「冬の全日本戦優勝」でした。練習の甲斐あり、冬の全日本戦では優勝することができ、目標を達成しました。中部圏の選手からの冬の全日本戦優勝は実に数十年ぶりの快挙でした。生きてきた環境も性格も違う全くの他人が歩み寄り、理解し合いながら技術を高めていく難しさ、リスペクトし合い二人で踊ることの面白さなど、競技ダンスでしか感じる事が出来ない事を多く学びました。

今回の結果は下級生に対して、中部からも優勝できるという希望を与え、中部圏の競技ダンスを盛り上げる一石を投じたと感じています。今後はOBOGとして部活に関わっていき、私たちの経験を伝えていくことで現在在籍している後輩が全国戦で活躍できるようにサポートしていきたいです。

講評：COVID-19により満足な練習が行えない中、2022年冬の全日本学生学生競技ダンス選手権で見事優勝を果たされた。中部圏の大学から優勝者が出るのは数十年ぶりの快挙であり、中部圏の競技ダンスを盛り上げる成果をあげたことは大変名誉なことである。今後は競技ダンスのアマチュア選手として更なる活躍を目指すとともに、OBOGとして本学のみならず中部圏の競技ダンスの実力向上への貢献も期待したい。

ALLEN Kim 国際開発研究科 博士前期課程 2年

I have been engaged in various national, regional, and international forums advocating for youth efforts in development, human rights, and issues of climate change that affect vulnerable communities in my country and the Pacific region. I initiated a water and sanitation programs and library book initiative in my Tubetube community of over 1000 people in Papua New Guinea (PNG).

I am [Chairperson for the Commonwealth Youth Council](#), representing youths across 56 member countries in international youth forums with efforts to be channeled to youth organizations in Commonwealth member states. While a student at Nagoya University, I represented youths in my country and the Pacific Region at various international events, including the [Youth4Climate Summit](#) in Italy, [COP26 in Glasgow](#), [Commonwealth Heads of Government Meeting](#) in Rwanda, [Young Pacific Leaders Conference in Hawaii](#), grant workshop in New Zealand and student [exchange program in the US](#), and Australia. My engagement in such forums has allowed me to raise concerns on issues affecting young people with policy recommendations on collective efforts to address the problems youths encounter.

In 2022, I received US\$10 000 in funding from the Government of the US to build a [library building for the Tubetube Primary School](#) in Milne Bay Province, PNG. This project will allow me to work with my team, the school teachers, board members, and the community to construct a well establish library to support students' and teachers' learning programs. I applied through various organizations and secured funding for four 5500 liters of [water tanks](#) for the community, primary and elementary schools.

My efforts in community development, national youth advocacy, and regional and international engagements in policy advocacy have been recognized as a recipient of the Nagoya University President's Award. At the Graduate School of International Development (GSID) at Nagoya University, students are given practical learning experiences and seminar discussions with development practitioners in the field. My study at GSID at Nagoya University has given me the insights, knowledge, and practical experience to continue my development efforts in my community, country, and the Pacific region. Following my graduation from Nagoya University, I want to contribute meaningfully and effectively to [driving policy implementation](#) in the development of my country, PNG, and the Pacific region.

Review : Based on his awareness of development issues in the remote island communities of Papua New Guinea, where he is from, he has been actively involved in solving problems related to water and sanitation, education, and youth development, as well as participating in numerous international conferences held around the world, which have transcended the framework of a student. This is the embodiment of a "Courageous intellectuals," and is highly commendable. We look forward to seeing him continue to work on development issues in his home country and demonstrate international leadership in the future.

【和訳】

私は、国内、地域、国際的なさまざまなフォーラムに参加し、開発、人権、気候変動など、自国や太平洋地域の脆弱なコミュニティに影響を与える問題に対する若者の取り組みを提唱してきました。パプアニューギニアの1,000人以上の人々が暮らす離島コミュニティで、水と衛生、教育、青少年育成、図書館建設を主導的に進めました。

私は、Commonwealth Youth Councilの議長を務め、56の加盟国の青年を代表して国際青年フォーラムに参加し、加盟国の青年団体に働きかけています。名古屋大学在学中は、イタリアでのYouth 4Climate Summit、グラスゴーでのCOP26、ルワンダでのCommonwealth Youth Council、ハワイでのYoung Pacific Leaders Conference、ニュージーランドでの助成金ワークショップ、アメリカやオーストラリアでの学生交換プログラムなど、さまざまな国際イベントに自国や太平洋地域の若者を代表して参加してきました。このようなフォーラムに参加することで、私は若者に影響を与える問題について懸念を示し、若者が遭遇する問題に対処するための集団的努力に関する政策提言を行うことができました。

2022年私はアメリカ政府から1万米ドルの資金を受け、パプアニューギニアのミルネベイ州にあるPrimary Schoolのために図書館の建物を建設しました。このプロジェクトでは、私のチーム、学校の先生、理事会メンバー、地域社会と協力し、生徒と先生の学習プログラムをサポートするためにしっかりとした図書館を建設することができました。私は、さまざまな団体に働きかけ、コミュニティ、小学校、小学校のための5,500リットルの水タンク4基の資金を確保しました。

地域開発、青少年支援、地域や国際的な政策提言活動への取り組みが評価され、名古屋大学総長賞を受賞しました。名古屋大学大学院国際開発研究科(GSID)では、実践的な学習体験や、開発現場の実務家によるセミナーでのディスカッションが行われています。名古屋大学大学院国際開発研究科での学びは、私の地域、国、そして太平洋地域で開発活動を持続するための洞察力、知識、そして実践的な経験を与えてくれました。名古屋大学を卒業した後は、自国パプアニューギニア、そして太平洋地域の開発における政策実施の推進に有意義かつ効果的に貢献したいと考えています。

講評 : ご出身地のパプアニューギニア離島コミュニティの開発課題に対する問題意識から、水と衛生、教育、青少年育成に関わる問題解決に積極的に取り組むとともに、世界各地で開催された数多くの国際会議に参加するなど、学生の枠を超えた活発な活動を行ってきた。その姿勢は「勇気ある

知識人」を体現するものであり、高く評価できる。今後も母国の開発課題に取り組むとともに、国際的な舞台でリーダーシップを発揮し、活躍することが期待される。

令和4年度総長顕彰を終えて 総評

総長顕彰制度は、学問の研鑽や文化・社会活動等を通じて、「名古屋大学学術憲章」の目指す人物像を実践している学生を讃えるとともに、その活動を広く周知することにより、優れた人格と創造性を兼ね備えた人材のさらなる創出の促進を図ることを目的として、平成15年度に創設されました。

今年度で記念すべき20回目を迎える総長顕彰制度へ推薦・応募があった学生達は、いずれも、その意欲や姿勢、各活動への情熱や熱意において素晴らしい者ばかりでありました。惜しくも受賞に至らなかった学生も甲乙付けがたく、今後の活躍を楽しみにしています。

受賞した学生・団体には、名古屋大学が育成を目指す「勇気ある知識人」として更なる研鑽を積み、今後の学生生活、社会生活において、後に続く名古屋大学生の目標となるような人材に成長していただきたいと心より祈念しております。

令和4年度総長顕彰委員会委員長 佐久間 淳一

令和4年度総長顕彰委員会

佐久間委員長（副総長・学生支援担当）

矢野委員（法学部長）、園田委員（経済学部長）、木村委員（医学部長）、宮崎委員（工学部長）、永田委員（心の発達支援研究実践センター長）、原田委員（生協理事長）

本顕彰に係る募集は、各部局への募集要項等送付、ポスター、ホームページを通じて、令和4年12月1日（木）～令和5年1月6日（金）の期間に行われ、その結果、「学修への取り組み」部門に9件の学部推薦が、「正課外活動への取り組み」部門に自薦・他薦を合わせて9件の応募があった。

これら合計18件の推薦・応募について、総長顕彰委員会による厳正な審査及び合議を経て、最終的に13件の学生及び学生団体を令和4年度総長顕彰として表彰することを決定した。